
クダラナイムカシバナシ

希菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クダラナイムカシバナシ

【Nコード】

N4841K

【作者名】

希菜

【あらすじ】

ほんとうにくだらないただのむかしばなし

23時の駅のホーム

真夜中 電灯の点滅 冷たいみたいに辺りは静か

両足で立った僕ひとり

ないたのは風だけ

ないたのは風だけ

全力で幸せを与えたかった

毎日全力 会うたび全力 僕の全力はそれはそれは穏やかな全力

音も立てずに全力だった

そしていつもみたいにやっぱり 僕の全力は力の限り空回り

あんなに幸せそうな出会った頃の君 公園のベンチ

ほんとになんにも知らなかったはずの僕ら

でも何も言わずに何故か触れ合った手 温かい

あの不思議を今でも忘れてはいない

どうしようもないくらい一人称の 僕という生き物

どうしようもないくらい つかいものにならなくなった 『恋』
という言葉

お互い 「すき」 といったのはたったの一回だけ

通じ合ったあとに響いてカタチになったその声

最後の日

ボロボロになった僕らふたり

無言の帰り道 電車の中 君のうちへはあと5分

自分に嘘はつけないからと

僕は君にその言葉を強請った

最初で最後の 君へのお願い

「さよなら」といつてください

僕の心は苦しくてもう自分を騙せなかった

悪いのは僕だ 悪いのは全部全部僕だ

もうもとにもどらない関係に終わりの魔法をかけて欲しかった

さあ手加減なんかいらない

残酷なくらいにその言葉で僕を突き放してください

その頃は確か雨が降り出していた

人気の無い秘密の帰り道

惨めな小雨

くだらない手加減だった

「さよなら」

君が馬鹿みたいに雨に濡れたまま　その言葉をくれたのは沈黙が千と八百秒は流れたあと

呼吸をするのも許されないようなくらいの完全な沈黙

「ありがとう」

馬鹿みたいに涙も出ない僕は背を向けて　立ち止まったり歩いたりを繰り返しながらその場所を去った

駅のホーム

手加減をしない雨に脳を心を殴られ続けて

僕は悪者になってかえってきた

幸せを与えられない悪者

たったひとりの人間の気持ちさえ理解できなかった愚か者

意識を売り払って気づけば駅にひとりっきり

思い出したように感情が身体に還元され始めて

僕は全力で涙をとめた

全力で

そして風が鳴いた

僕の本気は

『ごみ』

みたいなんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4841k/>

クダラナイムカシバナシ

2010年10月10日06時27分発行